



# 上海史研究と『良友』画報について

孫 安石（神奈川大学大学院外国語学研究科・助教授）



## 1 上海史研究の事始め

中国近現代史のなかで都市「上海」ほど特異な発展を成し遂げた街があるだろうか。上海は様々な顔をもつ。租界に代表される植民都市であり、中国共産党が成立した革命都市であり、中国人・欧米人・日本人・ロシア人などが同居する国際都市でもあった。また、文化大革命期間中の1967年には造反派による「上海コミュン」が宣言されたのも上海であった。そして、改革開放政策が絶好調を迎えた上海はいま浦東新区の高層ビルで代表される建築ラッシュの中で新たな進化を成し遂げる未来都市の様相を呈している。

このような上海近現代史の激変の源流をさかのぼれば、誰もが欧米諸国によって設定された租界という特殊な空間の存在に突き当たる。この租界（または「居留地」と呼ばれた）という特殊な空間は、時期によっては異なるが、中国、日本、朝鮮にもそれぞれ存在しており、中国の上海、日本の横浜、神戸、朝鮮の仁川などの外国人居留地は広くその存在が知られている。ところが、この租界の評価をめぐっては、欧米列強による国家主権の侵害という評価と異文化交流の場としての役割を積極的に評価しようとする二つの動きが常に拮抗してきた。

改革開放以降の中国の変化を歴史学研究という分野から眺める時に、その最も大きな変化は租界の役割に関する解釈をめぐって展開されたと言っても過言ではない。1980年10月に天津で開催された「中国地方誌研究会準備会」は、中国の17省・市の地方史研究者50余名が参加した新中国建国以来の最大規模の地方史研究座談会であったが、ほぼ同時期に上海では上海史研究の再開を論じる座談会が開催され、未開拓の「露天鋸脈」であるShanghaiology（上海学）の創生が議論されていたことは注目に値する。<sup>(1)</sup>この議論は1986年には上海社会科学院の熊月之氏によって上海の租界が近代中国に与えた積極的な影響を再評価することを提起する動きへと発展する。上海史研究の事始めである。そして、2001年12月には上海市档案馆によって国際シンポジウム「租界と近代上海」が開催された。

同シンポジウムで報告された多彩な論文のタイトルを眺めれば、中国の都市史研究が新たな段階を迎えていることを垣間見ることができる。<sup>(2)</sup>

## 2 革命史研究から生活史研究へ

従来の革命史と政治史を中心にしたイデオロギー研究の呪縛から解き放された上海史研究は、経済分野を中心に多くの研究成果が蓄積されたが、いまは社会史と生活史の分野にその研究の中心が移っているといえよう。このような上海史研究の変化のなかで、最も刮目すべきことは多くの新たな写真資料が発掘され、出版されたことであろう。例えば、唐振常主編『近代上海繁華録』（商務印書館国際有限公司、1993年）、潘光主編『猶太人在上海』（上海画報出版社、1995年）、上海市档案馆編『追憶 近代上海図史』（上海古籍出版社1996年）、上海図書館編『老上海地図』（上海画報出版社、2001年）、『老上海』（上海教育出版社）など多くの写真集が出版された。

筆者も編者の一人として関わった『日本僑民在上海』（上海古籍出版社、1998年）は上海の日本人コミュニティを政治・経済・社会・文化の写真資料から眺望することを試みたものである。この写真集を出版するときに、最も注意を払ったのは写真の出典を確かめることであった。複製され大量に消費される写真の特性からオリジナルの写真を特定する作業がぜひとも必要であったからである。

## 3 『良友』画報（1926年～1945年）の世界

ところが、20世紀前半の都市上海の自画像を写真などの図像を通して描きだそうとする時に、『良友』画報というグラビア雑誌の存在はきわめて重要な位置を占める。『良友』画報が注目される理由は1920年代から1940年代にいたるまでの都市上海の生活が同雑誌に凝縮されていると考えられるからである。中国近代史において写真を多用した大型総合グラビア雑誌がこれだけ長期間にわたって発行されたのはきわめて異例のことである。

『良友』画報は1926年2月に創刊され、1945年10月ま

で計172号を発行したが、その記事は中国の政治・経済を含むニュースは勿論、社会・生活に関する大量の図像情報を盛りこんでいる(図1)。とくに、この『良友』が創刊された1920年代は中国で大衆社会の到来とも言うべき社会現象が幅広く見られた時期で、都市を舞台に中産階級が生まれ、彼等の娯楽としてラジオと映画や百貨店などが登場する時期とも重なる点、注目されよう。

紙面の関係で、ここでは『良友』画報の記事を全面的に紹介することはできないが、幾つかの特徴的な内容を紹介することにしたい。

『良友』画報が上海の都市生活を伝える時に最も多くの紙面を割いたのが映画(電影)という新しいメディア媒体の紹介であった。1920年代から1930年代にかけて上海では、従来の印刷を媒介にしたメディア媒体(新聞、雑誌など)に加え、映画とラジオ放送などの新しい大衆媒体が次々登場し、人々の生活に大きな影響力を及ぼし始めた。ハリウッド映画が映し出す欧米人の生活スタイルは、上海の人々に新しい時代の到来を告げるものであったが、『良友』画報はその時代の流れを敏感にキャッチしていた(図2)。

その次に注目されるのは、『良友』画報が上海の消費生活を象徴する様々な広告を掲載していることである。その代表的なものが商品販売と娯楽の面で新しい商業文化を創造したと評価される百貨店関係の広告であろう。上海を代表する繁華街南京路に遊興設備として有名な「大世界」と「新世界」が営業を開始し、先施公司(1917年)、永安公司(1918年)、新新公司(1926年)、大新公司(1936年)などの百貨店が次々と開業することで上海は新たな消費文化の発信地としての役割を担うことになる。最新式のショーウィンドウ陳列による物品の販売だけではなく、ホテルとレストランを経営し、屋上には花園を設けている新新公司是『良友』画報の創刊号に「中国最新式大商店」をキャッチフレーズにする広告を掲載し、上海経済の黄金時代をうかがわせてくれる(図3)。

また、『良友』画報は都市上海の変容と女性の社会活動の関わりについても興味深い資料を提供してくれる。『良友』画報は世界のファッションの潮流を中国国内に紹介することに力をいれ、また、映画俳優の服装や化粧などについても多くの紙面を割いて紹介している。その端的な表れが、毎号の表紙の写真飾る美しい化粧のモダンガールであったことであろう。『良友』に登場する女性像は旧い時代の纏足で代表される旧女性ではなく、化粧をし、仕事をもち、美容室に通う消費社会をたくましく生きる

新女性そのものであった(図4)。

『良友』は従来の新聞雑誌が政治、経済などの報道に重きをおいたこととは違い、写真を多用することで、誰もがどこでも読める生活雑誌を目指し、時代をリードすることができた。20世紀の初頭、上海で花開いた都市の中産階級こそが『良友』画報の読者であったといえよう。都市上海の自画像を求める作業は『良友』画報を軸にしばらく続く(『良友』画報の研究会の活動については[http://www.kanagawa-u.ac.jp/05/ken\\_gengo/02.html](http://www.kanagawa-u.ac.jp/05/ken_gengo/02.html)を参照)。

参考文献

- (1) 上海社会科学院歴史研究所他編『上海史研究通訊』第1輯、1980年12月)
- (2) 同シンポジウムの記録は上海市档案馆編『租界里的上海』上海社会科学院出版社、2003年として出版された。



図1

『良友』画報の創刊号(1926年2月15日)の表紙



図2

ODEON映画館の広告(『良友』創刊号より)



図3

上海新新公司(百貨店)の広告(『良友』創刊号より)



図4

「美容術の技巧」(『良友』第86号より)